

2026 Document Service Forum
Reports Vol.71《追加：特別講演概要》

DSFホームページ 2026年5月更新

<https://www.fujifilm.com/fb/ja/solutions/industry/printing/dsf>

2026 DSF 中間発表会 in Osaka

Document Service Forum

1997

FORUM AIMED AT ENABLING INDUSTRIAL TRANSFORMATION (D)
CREATE THE NEW DE FACTO
ON-DEMAND PRINTING.



富士フイルムビジネスイノベーション
取締役 常務執行役員 (CTO)
鍋田 敏之 氏

各研究会からの発表のあと、特別講演として、富士フイルムビジネスイノベーション 取締役 常務執行役員の鍋田 敏之氏より、『AI活用の“格差”に終止符を！』～富士フイルムビジネスイノベーションのAI戦略～というテーマで、富士フイルムグループの事業変革の経験を踏まえ、AIの進化と日本企業が目指すべき「フィジカルAI」の方向性について語っていただきました。

本日はこのような機会をいただき、ありがとうございます。皆様のお顔を拝見していると、アットホームな雰囲気を感じます。このDSFの大会において、再びこのようなお話をさせていただけることを光栄に思います。本日は私のこれまでの経歴とストーリー、そして「AI技術の進展とフィジカルAIの可能性」についてお話しさせていただきます。普段はなかなかお話ししないようなリアルな内容も交えて進めてまいりますので、ぜひ楽しんでお聞きいただければ幸いです。

皆様すでにご存じのように、富士フイルムは写真フィルム事業の急激な縮小という危機を乗り越え、ヘルスケア、ビジネスイノベーション、エレクトロニクス材料などへ事業転換を遂げました。その過程で培われたのは、「発明（インベンション）」ではなく、現場課題を解決し社会実装する「イノベーション」の重要性でした。その中で私が深く関わったのが、医療AI開発に携わり、名医の診断ノウハウをディープラーニングで構造化し、医療品質を世界的に向上させる取り組みの推進です。この経験から、企業が持つ知見や経験をAIによって活用可能な形に変えることが大きな価値になると考えています。

現在の生成AIは急速に進化しており、AI同士が連携するエージェント型AIや、プログラミングを自動化するAIによって、イノベーションの速度はさらに加速しています。一方で、日本企業が強みを発揮できる領域は、製造業や医療、物流などの「現場」を伴う産業であり、その鍵となるのが「フィジカルAI」です。日本企業が長年培ってきた現場の知識やノウハウをAIに実装することで、大きな競争優位を築けると考えています。また、AI活用の最大の課題として、メールや文書、図面などの「非構造化データ」の存在があります。AIを実用化するには、この膨大なデータを整理・構造化することが不可欠であり、富士フイルムBIはその技術開発にも注力しています。

さらに、企業やサプライチェーン全体のDXを実現するためには、一部企業だけではなくエコシステム全体のデータ活用が重要となります。そのため、既存の業務や取引構造を変えずに、複合機などのエッジ機器にAIを組み込み、紙文書やFAXを自動的に構造化データへ変換する仕組みの実現を目指しています。

鍋田 氏は当講演において、富士フイルムBIが目指している方向性として以下の重要ポイントを指摘されました

① **富士フイルム復活の教訓**

- ・フィルム事業は10年間で約1/10に縮小
- ・ヘルスケア、ビジネスイノベーション等へ事業転換
- ・発明だけでなく社会実装が重要

② **医療AIで培った知見**

- ・名医の診断ノウハウをAI化
- ・AIで医療品質をグローバルに均質化
- ・「経験や知恵のデジタル化」が価値になる

③ **AI進化の本質**

- ・AIがAIを活用する時代へ
- ・エージェントAIによる高度な分業
- ・コーディングの自動化が急速に進展

④ **日本の勝機は「フィジカルAI」**

- ・製造業・物流・医療など現場産業が対象
- ・「モノ+コト」の融合
- ・現場ノウハウをAI化することが競争力

⑤ **非構造化データの構造化が鍵**

- ・データの約9割は非構造化データ
- ・ハルシネーションやコスト増加の原因
- ・AI活用にはデータ整理が不可欠

最後にまとめとして、

「生成AIの時代だからこそ、日本企業が持つ現場の知恵や経験を構造化し、フィジカルAIとして社会実装することが次世代の競争力になる」
と括られました。

